

『赤い武功章』においてヘンリーは本当に成長したのか
起点回帰と組織的思考の喪失

飯島 昭典

序

ストレスは古今東西を問わず、人間を悩ませ続けてきた精神的苦痛である。ある程度のストレスは、人間のパフォーマンスを向上させる事が明らかになっているが、たいていの人間にとってストレスは悩みであり、このストレスによって精神のみならず肉体にも不調を生じさせるものなのである。このストレスの極みを扱ったスティーブン・クレイン(Stephen Crane, 1871-1900)の『赤い武功章』(*The Red Badge of Courage*, 1895)¹は戦場という極限状態での一人の若者の意識が、作品の中で重要であり、自然主義文学といわれるこの作品の解釈は、主人公ヘンリー(Henry)の意識に自立性があるのか、あるいは自然主義文学の特徴の一つとして意識の自立性を認めず、全てが根拠のない偶然で片付いてしまうものなのか、が争点になると言っていいただろう。意識の自立性を認めるという場合には、彼は臆病な兵士から勇敢な兵士へと成長したという教養小説(Bildungsroman)的特徴をこの小説は帯びる事になる。²意識の自立性を認めない場合には、ヘンリーの成長は幻想であり信頼のおけるものではない、という解釈が成り立つ。この場合にはやはりこの小説は自然主義文学の特徴を色濃く帯びる事になるであろう。

ヘンリーは成長する事により、軍隊で組織を意識するようになったとするロバート・M・レシュニッツ(Robert M. Rechnittz)は、「優れた兵士となり、没個人的な存在となる。そして最終段階でのパラグラフで、不吉に先導者へついて行きながらも、兵士らしくない落ち着きをもって登場するのだ」(“ Becoming the good soldier, he becomes less the individual being; and he emerges in the concluding paragraphs in serene possession of an unauthentic soldier-self, ominously ready to follow his leader ”)(153)と述べている。そしてジェイムズ・ナジェル(James Nagel)も没個性に注目して「彼はギリシアのような戦いの夢を

恐れと共に放棄したのだ。恐れは戦場の赤い病魔となっていた。そして人類の一部として成熟しバランスの取れた自分自身を思い描くようになった」(“ he has relinquished his dreams of Greek-like struggles as well as his fear, which had become the red sickness of battle, in favor of a more mature and balanced picture of himself as part of humanity ”)(185)としている。この二人の批評家はヘンリーに明らかな成長を見ている。そして成長に「知覚」という条件をつけているマーストン・ラフランス(Marston LaFrance)は、「クレインの世界で男になるという事は、状況があるがままに知覚し、受け入れ、知覚が個人に要求する事を正直に果たし続ける事である」(“ to be a man in Crane's world is to perceive the human situation as it is, accept it, and remain personally honest in fulfilling the commitments such a perception demands of the individual ”)(129)としている。レシュニッツやナジェルが述べる没個性と集団の意識、ラフランスの述べる知覚の妥当性、どれをとってもヘンリーの意識が先に述べたように重要になってくるのである。意識の変化が成長につながったという上の三者の意見である。しかし、本当にヘンリーの意識は信頼の置けるもののだろうか。意識の変化によって彼は全く別の人間へと変わる事ができたのだろうか。

私がここで論点としたいのは、ヘンリーの成長の不確かさである。勇敢に戦うようになったという意味ではヘンリーはある意味成長を遂げ、変化を経験したと言えるであろう。私がここで述べたいのは、表面上は別の人間になったヘンリーに変わらない要素を見出す事が出来ないか、という疑問である。別の人間に変わったのではなく、戦場に行く前のヘンリーに繋がりを見出す事が出来ないだろうか。この疑問に答えを出すために本稿の第一部ではヘンリーの認識と現実の差について注目する。そして第二部では作品に見られる円環的構造について注目してみたいと思う。そして結論において上で挙げた三者の批評家が述べる

成長の要素に疑問を投げかけ、教養小説的解釈を否定し、自然主義文学の特徴が私の解釈によって強化されると共に、どの点でヘンリーの意識に信頼を置く事が危険なのかが明らかになるであろう。

1. 認識と現実の差

ヘンリーが南北戦争に参加したのは、ほとんど毎日のように新聞が決定的勝利の記事を載せ、「彼の想像力が抑えのきかない所まで心をかき立ててしまった」(“ his picturing, had aroused him to an uncheckable degree ”)(5)からに他ならない。小説の舞台の戦場への参加は、ヘンリーの想像力が起点となっているのである。志願したヘンリーが各地で歓迎を受ける事によって、自分が英雄であるような感覚を持つようになる。「素晴らしい武勲を立てる力が体内にみなぎってくるのを彼は感じた」(“ he had felt growing within him the strength to do mighty deeds of arms ”)(7)との説明があるが、このヘンリー自身の感覚と彼に対して違った見方を提示する人間との間に温度差があるのは、重要な事ではないだろうか。

作品中でヘンリーに対して冷めた評価をする人間は女性である。大勢の級友の中で実際にヘンリーに対して「明るい色の髪をした一人の少女が、快活な声で彼の軍人精神をからかった」(“ A certain light-haired girl had made vivacious fun at his martial spirit ”)(7) とあるように、ヘンリーの興奮に対して冷徹な評価を下す人物がいるのである。そして別の女性では、ヘンリーの母親が以下のような忠告を行っているのである。

“ You watch out, Henry, an’ take good care of yerself in this here fighting business you watch out, an’ take good care of yerself. Don’t go a-

thinkin' you can lick the hull rebel army at the start, because yeh can't. Yer jest one little feller amongst a hull lot of others, and yeh've got to keep quiet an' do what they tell yeh. I know how you are, Henry. (6)

「よく気をつけるんだ、ヘンリー。この戦争ってもんはな。体を大事にするんだ。よく気をつけて、体を大事にするんだ。はじめから、敵の軍隊をひとなめにしようなんてそんな事おもってはいけない。出来るわけないんだから。お前なんて他にいっぱいいる中のほんの小さな一人なんだ。大人しくして何でも言われた通りにしてればいいんだ。お前の事は、私がよく知ってるんだよ、ヘンリー」

軍人精神をからかう少女も自分の息子に卑小な存在である事を意識させる母親も、後にヘンリーが戦場から我を忘れて逃げ出す事を考えるならば、真実を穿つ役割を果たしていると言えるであろう。戦場に行く前のヘンリーが英雄の意識を持つという男性的野心の特徴で説明できるならば、その男性性と反対の女性の役割は、ヘンリーの認識の誤りを見抜く真実を穿つ存在と言えるであろう。ヘンリーによる戦争参加のための想像力という意識は、初めから信頼の置けるものではないのである。

彼が小さい頃から見ている夢で「彼の並外れて鋭い働きのおかげで、大勢の人々の安全が守られているところを想像していた」(“ He had imagined peoples secure in the shadow of his eagle-eyed prowess ”)(5)にもかかわらず、実際の戦闘に接する前のヘンリーは「戦闘を空想に描いた重い王冠や高い城郭とともに、遠い過去のことと考えていた」(“ He had put them as things of the bygone with his thought-imagines of heavy crowns and high castles ”)(5)という認識に至っているのである。戦争が進行中であり、様々な噂が飛び交っている状態で

のヘンリーの認識は、現実との乖離が見られるのが一目瞭然である。戦争に行く前のヘンリーも実際に戦争に参加している状態でのヘンリーも、彼の認識は必ずしも信頼のおけるものではない、という事が明らかなのではないだろうか。一兵士であるヘンリーの意識に語りの視点を置いたクレインは、語りが現実を欺くものとして用意しているのである。

ヘンリーの錯覚はこれだけにとどまらない。彼は、銃弾で自らが負傷し貧血でぐったりしているぼろ服の兵士を、戦場にうち捨てるという行為を行っている。彼はこの記憶を引きずるわけであるが、結末でのヘンリーは、このぼろ服の兵士とのいきさつを罪とは考えていないのである。「罪の意識を遠くに追いやるにつれて元気を回復していった」(“ gradually he mustered force to put the sin at a distance ”)(103)ヘンリーであるが、これは果たして精神の成長なのだろうか。

J・C・レバンソン(J. C. Levenson)は、ぼろ服の兵士のうち捨てについて以下のような評を挙げている。

[H]is desertion of the tattered soldier is the “ sin ” which Henry Fleming must learn to live with and put at a distance, and the whole series of episodes leading up to the desertion allows him to say that he has “ been to touch the great death and found that, after all, it was but the great death. ”[. . .] (168)

ぼろ服の兵士のうち捨ては「罪」であり、ヘンリー・フレミングが共に生きていき、そして遠ざけなければならないものである。うち捨てまでの全てのエピソードは、彼が「大きな死に触れ、結局大きな死は、単に大きな死ではない」とわかる事を可能にするためのものなのである。[.....]

レバンソンはぼろ服の兵士のうち捨てについて、成長のための必要悪と捉えているようである。そしてアルフレッド・ハバジャー(Alfred Habegger)は、このぼろ服の兵士のうち捨てをヘンリーの「道徳的弱さと戦争における偶然との組合せ」(“ a combination of moral weakness and the accidents of war ”)(234)と呼んでいる。必要悪と道徳的弱さという相反する意見が見られるヘンリーによるぼろ服の兵士のうち捨てであるが、私が支持するのはハバジャーによる道徳的弱さという意見である。

結末で罪の感覚を思い出すヘンリーであるが、彼のこの罪の意識は、結局周囲の人間が自分の非を咎めるのではないか、という心配に深く関係しているのである。自分の罪について考えるヘンリーだが、彼は以下のような反応を示す事になる。

He took no share in the chatter of his comrades, nor did he look at them or know them, save when he felt sudden suspicion that they were seeing his thoughts and scrutinizing each detail of the scene with the tattered soldier. (103)

彼は仲間のおしゃべりには全然加わず、そちらに目を向けようとしなかった。そして彼らが自分の心の中を見抜いて、ぼろ服の兵士との場面の、細かいいきさつを詮索しているのではないか、と急に疑いはじめた時以外は、彼らの存在に気付きさえしなかった。

一見すると周囲を忘れて自分の罪を深く考えているヘンリーのようである。しかし、直後に「自分の目が新しい方向に見開かれた気がした」(“ his eyes seemed to open to some new ways ”)(103)のは、周囲からの詮索の心配が契機となって

いるのは否定できないのである。詮索の心配を克服して、同時に罪の意識も遠くに追いやったヘンリーなのである。道徳的内省により、罪の意識が、意識下に沈んでいった場合と比べて、周囲のまなざしが契機となった罪の意識の消失は、次元の低いものである事は、明白ではないだろうか。そして道徳的内省を伴わない、同僚の兵士の死の忘却は、必ずしも成長とはいえないのである。ヘンリーは仲間の兵士を戦場で見捨てるという、人道上の罪を犯しているが、それを彼は自分の体裁の意識によって忘却したのである。人道上の罪を忘却することが必ずしもヘンリーにとって精神の成長ではない事は明らかである。この道徳的観点においても、ヘンリー自身が考える自分は大人になった、という認識は信頼のできるものではないのである。³戦場から逃げ出した時にヘンリー自身が考える様々な自己正当化のための逃亡の理由とこの人道上の罪の忘却、そして大人になるために必要な悪であるとする、先に挙げたレバンソンの意見は似たような性格のものである、と言えるであろう。どれもヘンリーの自己正当化のための詭弁なのである。

ここまでヘンリーの認識について現実との差を明らかにしてきたが、彼の意識は信頼の置けるものではない、という事が明らかではないだろうか。戦場に行く前のヘンリーの興奮は女性たちの冷徹な目によって誤りを明らかにされ、ヘンリーの道徳的問題は、内省による罪の意識の解決ではない事が提示されている。作品中のヘンリーの意識を信頼するのは、危険な読み方である事がわかるであろう。

2 . 作品に見られる円環的構造

この論文の目的は一見すると別の人間になったように思えるヘンリーに変化しない部分はないのか、という事を明らかにすることである。この第二節では作

品の構造に目を向けてみることにする。戦場でのヘンリーは敵との戦いがあるだけでなく、自分との戦いにも身を置いている。自分は実際に戦闘が始まったら逃げ出すのではないか、そして実際に逃げ出した後は、自己正当化を必死に行うという苦悩を抱きつつ「彼は自分自身との果てしない論争にふけており、どうしてもその問題に関わることをやめられなかった」(“ he was engaged with his own eternal debate. He could not hinder himself from dwelling upon it ”)(14)と苦しんでいるのである。実際の戦闘の恐怖もさることながら、この精神的苦痛の逡巡はヘンリーにとって、耐え難いものであるに違いない。戦闘そのものの時間よりも、苦悩する時間の方がはるかに長い時間なのである。この状態は戦闘の恐怖と共に、恐怖に近い大きな苦痛に違いないのである。

戦場に関わらない家でのヘンリー、昔の様々な思い出はどういうものなのだろうか。戦場で思い出す次の描写をここで引用してみたいと思う。

He bethought him of certain meals his mother had cooked at home, in which those dishes of which he was particularly fond had occupied prominent positions. He saw the spread table. The pine walls of the kitchen were glowing in the warm light from the store. Too, he remembered how he and his companions used to go from the school-house to the bank of a shaded pool. He saw his clothes in disorderly array upon the grass of the bank. He felt the swash of the fragrant water upon his body. [. . .] (57)

家で母親が作ってくれた食事の事や、大好きな料理の数々が主な場所を占めている食事の事が記憶に浮かんだ。皿の並んだ食卓が目の前に見えた。台所の松材の壁が、ストーブの暖かい明かりに照り映っていた。それから彼は

友人と一緒に学校を出て木陰のある池の土手まで歩いていった事を思い出した。土手の草の上に服がだらしなく散らかっているのが心に浮かんだ。いい匂いの水が、バシャバシャと体に跳ね返るのを感じた。

精神的苦痛とは全く違う心の平静が感じられる描写である。戦場以前のヘンリーは穏やかさに身を置いており、それゆえ戦場という極限の状態、それとは反対の安楽の境遇を思い出すのである。

では実際に戦闘を経験し、死に何度か触れた後のヘンリーはどういう状態に身を置くのだろうか。結末部分のヘンリーについて考察を行ってみようと思う。戦闘の恐怖を捨てたヘンリーは「今の彼は恋人のように、穏やかな空、新鮮な牧場、冷たい小川の光景を、つまり柔らかな永遠の平和な生活に強く心が向いていた」(“ He turned with a lover’s thirst to images of tranquil skies, fresh meadows, cool brooks an existence of soft and eternal peace ”)(104)とあるように心の平静の状態に身をおいているのである。つまりヘンリーが思い出した戦場にやってくる前の穏やかな生活と似たような状態に身をおいている、と言えるであろう。戦場に来る前が穏やかさであり、戦場でのヘンリーが恐怖と苦悩、そして結末でもう一度ヘンリーは穏やかな状態に身を置いているのである。最終センテンスにおける「川の上の重く垂れこめた雨雲から、一筋の金色の日の光が漏れていた」(“ Over the river a golden ray of sun came through the hosts of leaden rain clouds ”)(104)という描写もヘンリーの心象風景と重なり、柔和なイメージとなっていないだろうか。平静さを強化する描写なのである。

つまりこの『赤い武功章』には構造的な特徴として起点回帰の構造、つまり円環的構造が見られるのである。上で説明したこの構造というのは、戦場前の穏やかさ、戦争途中での恐怖や苦悩、そして結末での再度の穏やかさという特徴である。これが第一の円環的構造なのである。

そしてもう一つの円環的な特徴というのは、作品の自然描写である。作品の冒頭の次の場面を引用してみたいと思う。

The cold passed reluctantly from the earth, and the retiring fogs revealed an army stretched out on the hills, resting. As the landscape changed from brown to green, the army awakened, and began to tremble with eagerness at the noise of rumors. It cast its eyes upon the roads, which were growing from long troughs of liquid mud to proper thoroughfares. [...] (3)

地上の冷気がやっと和らぎ、霧が晴れるにつれて丘一面に広がって休んでいる軍隊の姿が次第にはっきり見えてきた。あたりの景色が茶色から緑色に変わると共に、軍隊も目を覚まし、体を震わせながら、うわさ話に真剣に聞き耳を立てはじめた。道路の方に視線を移すと、どろどろの長いどぶのようだった道が、次第にまともな往来らしくなってきた。[.....]

霧が晴れるにつれて不明瞭な状態から物形がわかってくる描写である。この事は作品の導入として、次に続く兵士たちの様子を明らかにし、戦争の場面である事を読者に印象付けるのに役立っている。つまり、霧の消失によって野営している兵士たちが見えてきて、同時にそれは戦争の状況設定を明らかにするのである。ここでは視覚が導入の道具になっているのである。作品のタイトルも『赤い武功章』であり、視覚に訴えるものとなっているが、⁴ここでの描写も景色が茶色から緑色に変わる、というように読者は色彩を意識する事になる。「遠い山並みにある低い眉毛のような所に置かれた赤い目のような敵陣のかがり火のきらめき」(“ the red, eyelike gleam of hostile campfires set in the low brows of

distant hills ”)(3)もやはり冒頭と同じように、読者は色彩という視覚を意識するのではないだろうか。

ヘンリー自身の認識は決してあてになるものではないが、何かを知るという事は、暗闇から光へというように、視覚と一緒に論じる事は相性が良いのではないだろうか。作品の冒頭で暗い状態から明るい状態への変化は、続くヘンリーの何かを悟る精神状態の導入としては、比喻として相応しいものであろう。そして、信頼は置けないかもしれないが、何か新しい事を認識した後に、作品が終わる時にもやはり視覚に訴える描写となっているのである。先ほどの穏やかさの円環的構造のところで挙げた作品の最終センテンスを再度引用してみる事にする。

「川の上の重く垂れこめた雨雲から、一筋の金色の日の光が漏れていた」(104)。雨雲という暗いものから漏れるのは金色の日光である。「光明がさす」という言葉があるが、ヘンリーの新たな認識の獲得と合わせて論じるのに適切な自然描写ではないだろうか。やはり最終場面も視覚的イメージが先行する描写となっているのである。

作品のはじまりが視覚に訴えるものであり、作品の終わりも視覚に訴えるものとなっている。これが第二節で挙げる二つ目の円環的構造なのである。視覚のイメージは、作品冒頭でヘンリーがこれから何も知らないという暗がりから、新たな認識を得るという明るい状態に変わる事を暗示し、そして結末で何かを悟ったヘンリーには、その状態を説明する、暗がりからの光明という自然描写が用意されているのである。自然描写とヘンリーの認識は、作品冒頭と終末で一致している、と言えるであろう。

ここで説明したようにこの作品では戦争に来る前の穏やかな状態から結末での再度の穏やかな状態、そして視覚の描写で始まり視覚の描写で終わる、というように時間の流れと作品の描写の配置が円環的構造となっているのである。このような特徴を考えてみるならば、主人公であるヘンリーが起点へ回帰すると

いう特徴をもっているのではないか、という仮定はそれほど見当違いではないのではないだろうか。完全に別の人間へと変化するのではなく、原点につながりのある変化である、という推論が成り立つのである。

結論

ヘンリーの成長に懐疑的な目を向けている批評家は私だけではないが、例えばジーン・カゼマジヨウ(Jean Cazemajou)は「皮肉は隠れてはいるが、正しさを強く感じるための装置として度々使われる。クレインの皮肉とはこの種のものだ」(“ Irony often serves as a vehicle for a veiled but deeply-felt sense of justice; Crane’s irony is of that kind ”)(144)と述べており、彼の意見は、ヘンリーが自分で感じた成長について皮肉と解釈するのに手助けとなるのではないだろうか。本稿の第一節ではヘンリーの認識は現実との差があり、信頼のおけるものではない、という事を明らかにした。第二節ではこの小説には円環的構造があり、起点回帰を連想させる、と証明した。どちらの節の結論によってもヘンリーが戦闘後に自分で感じた成長には信頼が置けない、という事がわかるのではないだろうか。認識はあてにならないし、変化前のヘンリーへの回帰が連想されるからである。作品の最後におけるヘンリーの様子をここで引用してみたいと思う。

It rained. The procession of weary soldiers became a bedraggled train, despondent and muttering, marching with churning effort in a trough of liquid brown mud under a low, wretched sky. Yet the youth smiled, for he saw that the world was a world for him, though many discovered it to be made of oaths and walking sticks. [. . .] (104)

雨が降り出した。疲れた兵士たちの行軍は泥水の中に足を引きずりながら長く続いた。兵士たちは落胆して、文句を言いながら、雲の垂れ込めた陰鬱な空の下のどろどろのぬかるみを、飼い葉おけをかき回すように進んだ。でも若者はにっこり笑った。多くの兵士はこの世界を罵声と杖で出来ていると思っていたけれども、若者にはこの世界は自分のためにあるのだ、と思っていたのだ。[.....]

周囲の様子とは違い、ヘンリーは自身を栄光に包まれた存在と考えている。最終センテンスの雨雲からさす光明もヘンリー自身の考える栄光を表しているとも考えられるのである。すなわち、雨雲が周囲の兵士なら金色の光がヘンリー自身である。ここで、個人の栄光に満足しているヘンリーは、作品の前半部分の戦場に来る前に自分を英雄と考えていたヘンリーと共通点を見出せないだろうか。まさに起点回帰を行ったヘンリーなのである。⁵

組織的思考が最優先にされる軍隊において個人の栄光はいかほどの意味があるのだろうか。ややもするとヘンリーの感じている個人の栄光は、戦場での組織的思考を無視したスタンドプレーに走ってしまう、という危険があるのである。エイミー・カプラン(Amy Kaplan)は、「ヘンリーが男になり、自分を持つようになるためには、自分を見るための観客を必要と感じ、周囲の人間の眼差しだけを基にして、自分で行動を起こせるのだ」(“ For Henry to become a man or to have a self, he needs to imagine an audience watching him, and can only represent his actions in the eyes of others ”)(326)と述べている。私やカプランの述べる戦場でのスタンドプレーの危険は、勇敢な兵士、成長した兵士の行動とみなされている、ヘンリーの実際の戦闘の様子に既に描かれている。敵が自分の前から後退していくのに、銃を撃ち続けるヘンリーの様子が17章で示されている。「一度、

彼は激しい憎悪に我を忘れ、ほとんど一人になって周りのものが撃つのをやめているのに、撃っていた。仕事に夢中になるあまり、銃声が途絶えた事に気付かなかったのだ」(“ Once he, in his intent hate, was almost alone, and was firing, when all those near him had ceased. He was so engrossed in his occupation that he was not aware of a lull ”)(76)。ここでのヘンリーに周囲との連帯感は見当たらない。まさにスタンドプレーである。⁶

先に説明したカゼマジョウの皮肉をさらに考察したのなら、戦場から逃げ出した時には持っていた「自分が逃げ出したのは、全滅が近づいてきたためだ、と思ったからだ。軍の一小部分である自分を守った事は、立派に本分を尽くしたことになるのだ」(“ He had fled, he told himself, because annihilation approached. He had done a good part in saving himself, who was a little piece of the army ”)(36)というある意味での組織的思考という連帯感を、変化後のヘンリーは放棄し、自分の栄光を最優先に考えるようになったのである。これは自己中心的思考であり、軍隊で優先される事ではないのである。

本稿の問いは一見すると成長を遂げたヘンリーに変わらない部分はないのか、どの点でヘンリーの意識に信頼を置くのが危険なのか、を証明する事であった。以上の説明で明らかになったはずである。個人の栄光を夢見て、戦場へやってきたヘンリーは、一見すると勇敢な兵士へと変化を遂げたが、変化を遂げた後も重視しているのは、個人の栄光なのである。これがヘンリーの信頼の置けない成長した、という認識の真実である。完全に別の人間に変わったのではなく、原点とつながりを持っているのが明らかであろう。雨の中、ぬかるみの中で、落胆した周囲の兵士たちと違い、笑みを見せながら行軍するヘンリーは連帯感を失ってしまった、という不安も残るのである。軍隊組織を考えるならば、彼の自覚した成長の意味は不確かである。⁷これが本稿の問いに対する答えである。

クレインは自然主義の作家という説明が度々なされるが、少なくともこの『赤

い武功章』で示される、個人の意思とは無関係な環境、運命の展開は、楽観的であり、いわゆるフランス文学からのゾライズムとは若干の差があるように思われる。自然主義文学の先駆者としてフランク・ノリス(Frank Norris, 1870-1902)も発表した作品の中で楽観的な進化論とも取れるような『オクトパス』(*The Octopus*, 1901)などの作品がある。自然主義の先駆者であるクレインやノリスとアメリカ文学における自然主義文学の完成者と言われるセオドア・ドライサー(Theodore Dreiser, 1871-1945)との系譜をたどるのも興味深い研究ではないだろうか。他の批評家の筆に期待しながら、私は筆を置く事にする。

註

- 1 . 以下、『赤い武功章』からの引用は、Stephen Crane, *The Red Badge of Courage*, Norton Critical Editions, 2008 の版に拠る。
- 2 . ゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』に顕著に見られる調和的自己形成の物語である教養小説は、ドイツ文学に特にその傾向を認めるが、その類型であるイニシエーション物語は、アメリカ文学の中でも多く見られる特徴のように思える。
- 3 . おそらく、ヘンリーの成長を強く意識する批評家は、この死に対してのヘンリーの態度を自己の死の恐怖を乗り越えたため、他者の死も克服した、という意見であると思われる。しかし、道義上、罪の意識の忘却は望ましいものではない、と筆者は考える。
- 4 . 赤のイメージは繰り返され、血や情熱、狂気を表すものとして現れる。一般的に赤は冷静さを表す色彩ではなく、感情の激しさ、活動性を意味するものとされ、ヘンリーの若さと関連を持たせやすい色彩と言える。
- 5 . この論の展開は序で挙げた二人の批評家レシュニッツとナジェルによるヘンリーが没個性の特徴を帯びるようになった、という意見と正反対である。ただし、彼らの意見に絡んだ結果が正反対の意見になったのであり、読み方を変えるならば、彼らの意見と近い読みも十分可能である。
- 6 . 孤立している行動のみならず、我を忘れての行動は決して望ましいものではない。しかも、憎悪を含んでの捨て鉢的反応は、作戦行動として組織の大きなマイナスにもなりかねない。この意味でもヘンリーの成長に、妥当性を認めるのは、疑問が残る。
- 7 . ロバート・シュルマン(Robert Shulman)は、クレインが描いた戦争の世界は、彼が反応し照らしているアメリカという大きな世界である(211)と述べ

ているが、個人ではなく社会という観点で論じたシュルマンの読みは独自性がある。ヘンリー個人の不確かさとシュルマンが述べる社会を結びつけるとしたら、無意味、無価値を標榜する続く時代のダダイズムの流れと結びつける事も可能である。この意味で、クレインはモダニズムを先取りしているとも考えられる。

引用·参考文献

- Cazemajou, Jean. “ *The Red Badge of Courage*: The Religion of Peace and the War Archetype. ” *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 144-51. Print.
- Crane, Stephen. *The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer and Eric Carl Link. New York: W. W. Norton & Company, 2008. Print.
- Colvert, James. “ Crane, Hitchcock, and the Binder Edition of *The Red Badge of Courage*. ” *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 238-64. Print.
- Habegger, Alfred. “ Fighting Words: The Talk of Men at War in *The Red Badge* .” *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 229-37. Print.
- Kaplan, Amy. “ Spectacle of War in Crane’s Revision of History. ” *The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer and Eric Carl Link. New York: W. W. Norton & Company, 2008. 319-27. Print.
- Kaplan, Harold. “ Violence as Ritual and Apocalypse. ” *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 195-201. Print.
- LaFrance, Marston. “ Private Fleming: His Various Battles. ” *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 127-43. Print.
- Levenson, J. C. . “ Introduction: *The Red Badge of Courage*. ” *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 164-80. Print.

Nagel, James. " Impressionism in *The Red Badge of Courage*. " *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 181-94. Print.

Pizer, Donald. " *The Red Badge of Courage*: Text, Theme, and Form. " *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 217-28. Print.

Rechnitz, Robert M. . " Depersonalization and the Dream in *The Red Badge of Courage*. " *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 152-63. Print.

Shulman, Robert. " *The Red Badge of Courage* and Social Violence: Crane's Myth of His America. " *Critical Essays on The Red Badge of Courage*. Ed. Donald Pizer. Boston: G. K. Hall & Co., 1990. 202-16. Print.